

# 関西学院大学 研究成果報告

2019年10月8日

関西学院 院長殿

所属：文学部  
職名：教授  
指名：ダニエル・ガリモア

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	関西学院留学 長期（滞在国：カナダ・イギリス）
研究課題	坪内逍遙（1859-1935）によるシェイクスピア劇の受容（翻訳等）
研究実施場所	（1）加トロント大学ビクトリア・カレッジ（10ヶ月間） （2）英エッセクス大学（2ヶ月間）
研究期間	2018年9月1日～2019年8月31日（12ヶ月）

## ◆ 研究成果概要（2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

幸運なことに、トロント滞在中の住まいはトロント大学図書館本館から5分で歩ける場所にありましたので、10ヶ月の間坪内逍遙関係の様々な和文資料、そしてシェイクスピア劇やイギリス文学の本も200冊以上借り出しました。日本からは坪内訳のシェイクスピア全40冊を別送していただきましたので、現在までにその内の30冊を読み終えました。

主な留学目的は、坪内のシェイクスピア翻訳とシェイクスピア研究についてのモノグラフを作成するものでしたが、トロントで6万語を著しました。現在、出版社に提出できるチャプターを書き直し、10万語程の第一原稿を2020年4月までに完成する予定です。

学院留学により、坪内に対して以前より徹底的な研究ができたことで、坪内についてどのような本を書きたいのか具体的に決まりつつあります。それは、坪内のシェイクスピア翻訳と研究を入門とするような内容ですが、第一章で坪内がシェイクスピア翻訳者として博した評判と彼によるシェイクスピア受容の諸段階、第二章で坪内のシェイクスピア論とそれによるイギリス文学や西洋シェイクスピア批評の影響、第三章で坪内のシェイクスピア翻訳文体の発展と江戸文学や言文一致運動の関係、第四章で坪内のシェイクスピア翻訳文体の主な特徴、第五章で坪内のシェイクスピア翻訳の演劇性と上演史、そして第六章で坪内の同時代の人々や文化国家主義の関係といった課題を扱いたいと考えています。坪内が参照していたシェイクスピア版と彼が晩年に行なった翻訳改訂も意義深い課題だと認識しています。こうした研究の挑戦は、単に坪内の日本語の難しさ、そして坪内の幅広い学

識というのですが、坪内がシェイクスピア劇について鑑賞する時、「調味」と「情味」が彼自身の翻訳やエッセイにも感じられることは大きなアピールとなると言えます。以上第三章の一部分は私が今年9月28日開催の本学英米文学会総会で行なった講演、そして他部分は今年と来年の10月に開催する予定の学院外学会の研究発表の資料となっています。

トロントの留学先は、トロント大学ビクトリア・カレッジ内のノースロップ・フライ研究所でありました。同研究所の客員研究員を勤め、11月14日に坪内がシェイクスピア劇をどのように評価したかを説明する講演を行いました。内容は2020年に *Critical Survey* 誌に出版される予定です。ビクトリア・カレッジの担当者は学長のアンジェラ・エスタハンマー教授及びノースロップ・フライ研究所長のロバート・デヴィッドソン教授でありました。研究所に所属していた日本社会人類学専攻の研究生一名に毎月指導し、学期中毎週カレッジの食堂で昼食を食べたり学友を誘ったりし、カレッジが開催した特別講演等に出席したこともありました。ビクトリア・カレッジで半世紀を務めたノースロップ・フライは20世紀中の一番著名な英文学者として認められています。12月にフライがカナダ政府によって「国家歴史人物」と任命された指名式に出席し、後にフライの全シェイクスピア批評集を読みました。もう一方との触れ合いはカナダ詩人や文学者であるジョナサン・ハートという方ですが、ハート教授とシェイクスピア翻訳についての論文集の編集で協力をしています。

自分の坪内研究に加えて、私は現代翻訳理論も研究し、キプロス国立大学の学友と協力し、2021年にシンガポールで開催予定の次回シェイクスピア世界大会のためのシェイクスピア翻訳を論じるワークショップの提案を作成し提出しました。更に、本学の担当科目にも役立つネッサンス文学、現代イギリス演劇、カナダ文学と比較文学を幅広く読みました。9月にバンクーバー市を訪問し、ブリティッシュ・コロンビア州立ビクトリア大学が開催した日本の文化における「非ヒト」の存在を扱った国際学会に出席し、一つのセッションを司会し、3月に米デンバー市で開催されたアジア研究協会の大会に出席し、日本文学専門のセッションに幾つか聴講し、専門出版社の代表に会ったこともありました。又、坪内作のシェイクスピア劇の影響が明らかになる歌舞伎劇『桐一葉』を翻訳しようという計画もありますから、5月にニューヨーク市に訪問し、共訳者のジョン・ギレスピー氏に会いました。8月に、自分の研究を公にするようなホームページを作り始めました。

トロント滞在の留学期間は6月30日に終わり、イギリスに移り、ロンドンに近い実家に泊まり、20世紀前半に活躍していた舞台装置家のエドワード・ゴードン・クレイグの急進思想とその思想を大正時代の日本人シェイクスピア学者がどのように受容したかを研究するため、大英図書館に3回訪問し、7000語の研究論文を書き始めました。エッセクス大学文学部のキャサリン・コッキン教授によって8月末に招聘講演をする予定でしたが、両親の健康状態のためキャンセルすることにしました。ただ、論文をコッキン教授に提出し、将来の共同研究プロジェクトに参加したいと思います。尚、4月にもイギリスへ訪問した際と今夏も、2001年自身の博士論文を口頭試験された教授二名に再開できたことは良い機会となりました。

研究以外の活動として、私はトロント大学付属のコンサート・バンドに入り、クラリネットを担当し、2回のコンサートに参加し、地元教会のメディテーション・グループにも所属していました。オンライン教育でオランダ語、韓国語とスペイン語の講座に合格し、大学付属のプールで水泳レッスンを受け健康増進に努めました。又、カナダ人演出家のロベール・ルパージュ演出のシェイクスピア上演を11月に、5月にルパージュ自作の舞台上演を観ることもとても貴重な経験になりました。

関西学院大学より一年間の学院留学が授与され、誠に感謝を申し上げます。今後もビクトリア・カレッジとの繋がりを大切に守り、坪内研究を発展させたりするように研鑽していきたいと思っています。もし自国のイギリス或いは日本でサバティカルを取ることになったら、モノグラフをもっとたくさん書くことができたかもしれませんが、カナダへ行って日本の生活より一歩後ろに下がることで、様々な未来につながる経験を抱くことができるようになったと思います。

報告用紙①

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間は大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。